

【司会】 それでは、第一部を開始したいと思います。第一部は、中山大学中文系名誉教授の林慶勳先生に司会をしていただきます。

【林慶勳】 竹内先生、一ノ瀬先生、ご出席のみなさま、おはようございます。みなさんがこの会場にいらっしやることを大変光栄に思っております。ようこそいらっしゃいました。

台湾の社会には三つのタブーがあります。ひとつは男女のセックス、ひとつは糞尿、そして死です。我々は今日、その死について議論をしようとしています。死は多くの人たちがおされているもので、私もその例に漏れず、死をとてもおされています。今申しあげましたように死はタブー視されているため、直接に「死」という言葉を使わないで、「往生」、「年をとった」、「去った」、あるいは「物化した」というような言葉で死を表すことが多くあります。また死は、中国語では数字の「四」と同じ発音のため、「四」という数を避ける傾向もあります。台湾では死はこのように捉えられているのですが、日本の場合はどうなのでしょう。

本日はさまざまな分野の専門家が来てくださっていますので、死生について大いに議論していただけたらと思います。それではまず、竹内整一先生にご発表いただきたいと思います。よろしくお願ひします。

---

## 「はかなさ」の感受性

――転機としてのクライシス

---

竹内整一

鎌倉女子大学教授

---

### 一．「遺伝的記憶」としての「天然の無常」

周知のように、クライシス crisis という英語は、危機であると同時に、分岐点・転機を意味しています。東日本大震災から半年、今われわれは、まさに大きなクライシスに立ち会っています。

われわれは、この半年で日本に起きたことを目の当たりにしながら、いやおうなく文明とは何か、科学・技術とは何か、自然とは何か、人間とは何か、といった問いの前に立たされています。そしてその問いは、あらためて、われわれにとつて何がどうあることがほんとうに「よい」あり方なのかという問いにつながっていきます。

“あらためて”には、あえて分けければ、「こと新しく」という意味と、「ふたたび改めて」という意味がふくまれています。前者に比重をおいていえば、今問われているのは、これまでになかった、現代に特有の新しい



竹内整一氏

とを思い起こします。

——長考するとき何を考えているかというところ、こう指せばああ指してくるんだろう、といったような、これからのさまざまな可能性もむろん考えるが、むしろ初手から現在の局面までにいたるまでの過程をもう一度おさらいをしていることが多いんだ、と。つまり、どういう流れの中で今の局面ができてきたかということを確認かめ直す、すると、そこからおのずとその次の手も出てくるというわけです。

クライシスに立ち遭ったとき、その事態を、以上のような、「新しさ」と「古さ」へと、二重の意味で、あらためて「真剣に問うところに、その危機は「よい」転機へと転ずることができるのだと思います。

さて、昭和のはじめころ、物理学者で随筆家であった寺田寅彦は「日本人の自然観」という文章の中でこう言っています。

問題としての文明や科学や技術のあり方、それに基づいた社会や生活のあり方への問いです。「新しさ」そのものへの問いです。

一方、「ふたたび改めて」という、後者の意味に比重をおいていえば、とくに生き方ということにおいて、人はこれまで生きてきたものをお措いては、新しいものを発明するなどということは決してできないのでありまして、肝心なことは、これまでのものを見返し、吟味・調査し（例えば、「財布の中身をあらためる」という用法）ながら、それを今に見合ったものとしてどう賦活・再生しうるかということです。「来し方」「古さ」への問いです。

将棋の羽生善治さんが、あるインタビュでこう言っていたこ

地震や風水の災禍の頻繁でしかも全く予測し難い国土に住むものにとっては天然の無常は遠い遠い祖先からの遺傳的記憶となつて五臓六腑にしみ渡つている。

直前に起きた「昭和三陸地震」や、大正十二年に起きた、犠牲者を十四万人出した関東大震災、さらには、明治二十九年の「明治三陸地震」（これも、死者・行方不明者を二万二千人出しています）などの例をふまえて、寺田は、こうした自然災害は、「わが国建国以来おそらくほぼ同様の頻度をもつて繰り返されてきたものであろう」と言い、それゆえそれらが「遠い遠い祖先からの遺傳的記憶」となつて「五臓六腑にしみ渡つている」というわけです。

無常というのは、もともと仏教語で、人間をふくめてこの世界をつくりあげているものは、すべてたえず変化し生滅していくのであつて、何一つとして永遠にとどまるものはないという考え方です。それが日本の、こうした地震や台風、また刻々と変わりゆく四季折々の風景など、日本の自然風土とあいまって、独自の、いわば民族的メンタリティともいふべきものになつてきたものです。

「色は匂へど散りぬるを 我世たれぞ常ならむ（花の色は移りやがて散つていく。この世にいったい何が移り変わらぬものがあるか）……」という「いろは歌」は平安のむかしから、一国のアルファベットとして親しまれ歌われてきております。こうしたところにも、いかに無常観が「遠い遠い祖先からの遺傳的記憶となつて五臓六腑にしみ渡つている」かをうかがうことができるように思います。

ですから、今度のことも、寺田に言わせれば、（物理的な規模はともあれ）、「千年に一度」とか、「未曾有」という言い方は、きつと、違う、と言うのではないかと思ひます。ただ、われわれの側が忘れていただけだ、

と。

ところで、寺田は、「天然の無常」という言い方をしています。常でない、というこの世のあり方としての無常は、天然・自然の「おのずから」の働きとしての無常だということです。そもそも、この文章は、「日本人の自然観」というタイトルのエッセイの中で述べられていたものですが、この、自然の「おのずから」の働きとしての無常という捉え方は大切です。

つまり、無常という、われわれには不可抗・不可避の働きは、つまり、自然の働きであり、その自然というのは、ただ暴力的にわれわれを威圧するばかりではなく、大いなる慈しみ、恵みも与えてわれわれを育ててきたものであるし、また、自然の無常の不安定な働きによつてこそ、きわめて多様多彩な風光や景色がたち作られ、またそうした環境の多様性によつて日本人の感じ方や考え方、生活や文化の多様性・特異性も育て上げられてきたのだとも述べています。「日本人の自然観」でこう述べています。

自然の神秘とその威力を知ることが深ければ深いほど人間は自然に対して従順になり、自然に逆らう代わりに自然を師として学び、自然自身の太古以来の経験をわが物として自然の環境に適應するように務めるであろう。前にも述べたとおり大自然は慈母であると同時に厳父である。厳父の厳訓に服することは慈母の慈愛に甘えるのと同等にわれわれの生活の安寧を保証するために必要なことである。

一般的にいつても、日本の自然は、このように、地震や台風、早魃や疫病といったような災厄ももたらすと同時に、豊かな恵みをもたらすと考えられてきたものですが、古来から日本の神道においては、われわれにどうにもならない災厄は、みな崇り神の所為であると考え、まずその神の名前を特定し、つぎにそれを怖れ祭り、

願ひ祈ることによつて、その荒々しい働きをやらわらば、われわれを恵み守る働きへ転じるようにと祭祀、祭り事を営んできたときとされています。

つまり、地震や台風は、たしかに不慮の無常のことながら、それは如何ともしがたい「おのずから」の、その無常だということだ。「天然の無常」——、そうあらためて「覚悟」して受けとめなるとき、そこに、われわれには不可知（知りえない）の、しかし大いなる「慈」<sup>いづくしみ</sup>の働きが働いてくるはずだ、と。そうしたことをふくめ「遠い遠い祖先からの遺傳的記憶」を思い起こしながら、そこで、それぞれのできるかぎりの「みずから」の努力をするならば、いかなる大災害であれ、祖先たちがみなそうしてきたように、必ずや立ち直ることができるという確信が寺田にはあつたように思います。

## 二、「文明が進むほど天然の暴威がその劇烈の度を増す」

以上のことを確認したうえで、じつは、問題はもう少し込みいったところにあります。

同じころに書かれた「天災と国防」というエッセイでは、以上のようにして、「数千年来の災禍の試練によつて日本国民特有のいろいろな国民性のすぐれた諸相が作り上げられ」れてきたが、「しかしここで一つ考へなければならぬことで、しかもいつも忘れられがちな重大な要項がある。それは、文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増す」と警告しています。

つまり、数千年来の「遠い遠い祖先からの遺傳的記憶」におけるすぐれた蓄積とは必ずしもそのままではうまく合わない、あるいは合わせ方が問われてくるものとしての「文明」「科学」といった「人為」のあり方への問題です。いうまでもなくそれは、「近代日本」（寺田の「現代日本」）特有の問題です。「日本人の自然観」

でも、こう言っていました。

人間の力で自然を克服せんとする努力が西洋における科学の発達を促した。……西欧科学を輸入した現代日本人は西洋と日本で自然の環境に著しい相違のあることを無視し、従って伝来の相地の学を蔑視して建てるべからざる所に人工を建設した。そうして克服し得たつもりの自然の敵父のふるった鞭のひと打ちで、その建設物が実にいくじもなく壊滅する、それを眼前に見ながら自己の錯誤を悟らないでいる、といったような場合が近ごろ頻繁に起こるように思われる。

この文章がわれわれに「厳しい」のは、むろん東北・関東各地の海沿いの被災地各地のことでもありますが、とりわけ「原発」という「人工」の受けている現状です。今や「原発」の問題は、震災や津波と重なりながら、それとは異なつた位相で不気味に問われてきていますが、むろんこの両者は切り離して考えるべきではなく、寺田がそうであるように、あくまで対の問題として考えるべき事柄だろうと思います。何と言っても寺田は物理学者でありまして、当時、X線研究では世界でもトップレベルの科学者の提言だということでもあります。そのことも関わりますが、このたびの震災報道には、「人災」という言葉があふれています。人災というのは、自然災害そのものでなく、人間が介在して、その不注意や怠慢、不手際によつて引き起こされた災害のことですが、それはむろん、そうである部分は当然あるでしょうし、そうであるかぎり責任が生ずるし、詳細な検証が必要になってくるのはあたりまえのことです。

が、そのことを十分に確認したうえで、このあふれるほどの「人災」といふ言い方の中に、私は、ある種の違和感を感じています。その言い方の中には、ややもすれば、今度の災難は人間が招いた災難であるがゆえに、

その責めは誰かが負うべきであり、ということは、その責めによって失われたものが補填・回復しうるのだといったようなニュアンスを感じさせるものがあるからです。

「人災」という言い方は少し違うのですが、このたびの震災では、「想定外」とか「想定以上」といった言葉がくりかえし使われてきました。たしかにマグニチュード九・〇は「未曾有」「想定外」の規模であったかもしれませんが、すこし災害の歴史をふりかえってみれば、自然の猛威はつねに「想定外」の暴力をもって、われわれを襲って来ていたはずで、関東大震災でも伊勢湾台風でも阪神・淡路大震災でも、すべて、いわば「想定外」であったからこそ、何千、何万という犠牲者が出たということです。

にもかかわらず、今回「想定外」という言葉がこれだけ使われたのは、それだけ今のわれわれが、知らず知らずのうちに、現代文明の力を、とくに高度に発達させてきた科学の力をいかに過信してきたかということを示しているように思います。「安全神話」とは、ほんとうは「はかりしれない」自然の働きやこの世のさまざまな出来事を、みな「はかりうる」もの、「はからいうる」ものと想定したところに形成されてきたものだと思います。

### 三、「はかる」営み

「はかる」という言葉について少し確認しておきたいと思います。「はかる」の「はか」とは、もともと「イネやカヤなどを植え、また、刈ろうと予定した範囲や量」（『岩波古語辞典』）のことで、「はかどる」「はかがいく」の「はか」でもある）、その「はか」の動詞であるこの言葉には、きわめて多様な意味がふくまれています。漢字で見るとよくわかります。



まず、ものごとを計量・計測するという「計る」「量る」「測る」があります。つぎに、そのようにして計量したものをもとに、あれこれ調整・案配・推測したりする「衡る」「料る」「忖る」や、「会議にはかる」の「諮る」があります。そして、そうしたものをまとめ、何ごとかをもくろみ企てるという「図る」「画る」「策る」、さらには「謀る」があります。

つまり「はかる」ということは、人がある意図や計画をもって生活していくうえでは、かならず求められる基本的な営みということが出来ます。その意味で文明とは、人間がさまざまに「はかつて」きた歴史の蓄積でもありますが、その「はかる」ことが、アンバランスなまでに突出して求められてきた、それ故、ある種の変質をもって求まれてきたのが、近現代の文明、とりわけ科学技術的な考え方ということが出来ます。M・ウェーバーは、近代というのは、以上のような計測可能性を保障する手続きが拡がることだと言っています。

近代の科学技術の基本的な発想は、ものごとを「はかり」にかけて計量し数値化し、そのことによって、人生や世の中を、さらに便利に、さらに安全に営もうとするところにあります。ここでは、ひたすら明瞭に「はかる」こと、効率的に「はか」どることが求められてきました。そして、それは科学・技術にとどまらず、やがて、経済や文化、社会の仕組みのあり方にまで、「はか」第一主義が支配・貫徹するようになってきたわけです。

とりわけそれが第一義となっている社会が、いわゆる *business* (*busy-ness* ≡ 忙しさ) 社会だといわれています。そこでは、何より「はか」がいくこと、はかばかしく結果を手に入れることが求められます。プロジェクト・プロデュース・プロモーション・プログレス……といった、西洋近代が、もともと抱えていた前のめり (*pro-*) の姿勢、前望的 (*prospective*) な時間意識 (鷲田清一『老いの空白』) といったものをそこに見いだすことができます。

が、このたびの震災で、自然の力とは、ついぞわれわれの「はかる」営みなどに飼い慣らされるようなものではないということが根底から思い知らされたということです。さらにはまた、核エネルギー——それは、もともと太陽の核融合のエネルギーで自然と言えば自然ではありますが、そこに手を突っこんでとりだしてきたこのエネルギーが、はたしてわれわれの「はかる」ことのできる手の内にある技術なのかどうか、原子炉事故の収束がおぼつかない状況では、また、放射能汚染問題がうまく処理できない状況では、きわめて深刻に問わざるをえないところにまでできてしまったように思います。

そこがまさに、クライシスということですが、この危機を分岐点として「良い」あり方へと転回していくためには、より根源的な生き方・考え方・感じ方のレベルで考え直すことが必要になってこざるをえないように思います。最初に述べた「あらためて」ということですが、より根源的な生き方・考え方・感じ方のレベルで「あらためる」とは、何をどう「あらためる」のかということなのです。

つとに昭和四十年代のなかごろ、現代文明を生きるわれわれの未来を「あかん。人類は滅びるしかない」などとも言っていた文明学者・梅棹忠夫は、現代文明の原動力となっている科学をこう捉えています。

人間にとって、科学とは何か、これは、わたしはやつぱり「業」だと思っております。人間はのろわれた存在で、科学も人間の「業」みたいなものだから、やるなどいつてもやらなわけにはゆかない。いま現存する科学技術を、全部消滅させることができても、人類はまた、おなじことをやりはじめます。真実をあきらかにし、論理的にかんがえ、知識を蓄積するというのは、人間の業です。……自分で業であることを自覚してコントロールすることをしらなければいけないと思うんです。人間のものの考え方として今

までとちがう考え方をしなければならぬ。

(梅棹忠夫「未来社会と生きがい」)

人間の知的欲求・欲望が際限なく前に前にと進もうとするので、やがて環境や制御可能なキャパシティを超えてしまうということです。もともと科学者の知的好奇心の発見であった原子力が今まさしくそうであるように。

梅棹の未刊に終わった『人類の未来』の構想ノートは、その最終章を「暗黒」としています。そこには「破壊」という言葉も見られます。しかし、その最後は「光明」という言葉で結ばれています。梅棹がかううじて語ろうとした「暗黒のあなたの光明」とは何か。そのヒントとして、そこに、「理性」対「英知」という言葉を記しています。「真実をあきらかにし、論理的にかんがえ、知識を蓄積する」という「理性」の営みだけでなく、「英知」という「人間のものの考え方として今までとちがう考え方」としての「英知」の提唱です。(以上、NHK・ETV特集「暗黒のあなたの光明——文明学者梅棹忠夫がみた未来」二〇一一年六月五日放映、参照)

構想ノートでは「英知」の何たるかについては述べられてはいませんが、いずれにしても、「真実をあきらかにし、論理的にかんがえ、知識を蓄積する」という、まさに「理性」の「はかる」あり方ではない考え方——単に頭で考えるというだけではない、体や心で考え、感じるといったこともふくめての知・情・意のあり方を構想していたのだらうと思います。

#### 四 「はかない」という思想感情

そこで私は、梅棹の言うような意味での「英知」の一つの契機になりうるものとして、「はかる」理性の営みの対照として、「はかない」という思想感情についてあらためて受けとめ直してみたいと思います。

「はかない」とは、先に見たような「はか」が「ない」ということです。つまり、「はかない」とは、「つとめても結果をたしかに手に入れられない、所期の結実のない意」が基本で、そこから「これといった内容がない」「手ごたえがない」「あつけない」といった意味を持つようになった言葉です。

それはむしろ基本的にはネガティブな意味内容をもっていますが、しかし同時に、そこにおいてこそ可能であるようなポジティブなものを見いだすことができる感情であります。つまり「はかない」ということを、あらためてきちんと感じ取ることに於いて、これまでの「はかり」「はかどる」こと第一主義であったビジネス社会の「忙しさ」のなかで、心亡ぼしてきた——忙、という漢字はそういう意味でもありますが——何ものかを取り戻すことができるということなのです。

いうまでもなく「はかない」とは、無常観を表す感情として、それは寺田寅彦が言うように、われわれの「五臓六腑にしみ渡っている」はずだという、「遠い遠い祖先からの遺伝的記憶」でありまして、それをあらためて思い起こすことによつて、今突き当たっているクライシスに立ち向かう大事な力ギを見つけたぞうということです。

梅棹が以上のように述べていたのと、ほぼ同じところに、哲学者の唐木順三は、こう述べています。

今日ほど「無常」の事態を眼前にさらけ出してある時代は、さうざらにはない。現実の事態が「無常」な

のである。言つてしまへば、ニヒリズムが普遍化し、すでにニヒリズムといふ実態が観念されえないほどに、ニヒリズムそのものが、のさばつてゐる。ニヒリズムはすでに特定人の特定の主義や意見ではない。世界を挙げてニヒリスティックなのである。人はそのなかにありながら、それを意識しえない。その現実には、一見不満はなささうにみえる。いな、それをこそ新しい時代と思つてゐるやうにさへみえる。然し、根本のところでは、世界を挙げて、このことのために不安である。繁栄し、進歩すればするほど不安である。この繁栄、この進歩が、死への、滅亡へのそれではないかという不安は世界の現実なのである。……然し科学はさらに進歩するだらう。進歩することよりほかに能のないのが科学といふもの、それは科学のいはば宿命といつてよい。進歩をやめれば、近代科学の理念も事実もくづれ去つてしまふ。

(唐木順三『無常』)

四十年以上も前に書かれたものですが、その時代認識はいささかも色あせていない、というよりむしろ、この指摘はまさに現在の日本の現実を言い当てたものとなつてきています。唐木は、こうした状況認識にたつて、こう端的に提言しています。

もはや、迂路をたどるべきではない。無常なるものの無常性を、徹底させるよりほかはない。

ここでの無常は、ニヒリズムと同義語です。しかし、無常(ニヒリズム)の無常(ニヒリズム)性を徹底させるとはいつたかどうかのことなのか、そのことによつて、何がどう開けてくるのか、それは、ますます「はかなさ」を深化させるだけのことではないのか、という疑問も出てきます。むしろ唐木においてそのニヒリズム

ムは、その徹底において、ある肯定的なものへと転ずるといふことが思いみられているのですが、だとすればその思想的中身がさらに問われてきます。

ここでも、こうした問題について考えてみたいと思っただけですが、ところで、唐木自身がこの本で具体的にやっていたことは何かという点、「はかなし」とか、無常という言葉が、どういふふうに使われていたかを、思想系譜的に丹念にたどることでした。そしてそのことによって、「諸行無常、一切皆空、さういふ言ひふるされて具体的意味を失ってしまった言葉の意味内容を、いまあらためて考へる」ことでした。唐木にとつては、そうすることは、けつして「迂路をたどる」ことではなかったということなのです。

最初に述べた厳密な意味での「あらためて」ということだろうと思えます。「五臓六腑にしみ渡っている」「遠い遠い祖先からの遺伝的記憶」を思い起こし、それをどう肯定・プラスへと転ずるかについては、「世はさだめなきこそいみじけ」(『徒然草』)をはじめ、日本人の無常観にゆたかに語られているものでありますが、それをどう生き生きと現代に蘇らせることができるかということなのです。

ここでは、そのことを近代の出発点で確認しながら、そのあと現代の問題として考えてみたいと思えます。最初期の近代日本において、合理的・実用的な科学(サイエンス)としての「学問」を啓蒙した福沢諭吉の人間観は、例えば、こうしたものです。

……宇宙無辺の考えをもつて独りみずから観ずれば、日月も小なり、地球も微なり。まして人間のごとき、無知無力見る影もなき蛆虫同様の小動物にして、石火電光の瞬間、偶然この世に呼吸眠食し、喜怒哀楽の一夢中、忽ち消えてあと痕なきのみ。

(福沢諭吉「人間の安心」『福翁百話』)

人間は要するにどう安心しうるか、ということ論じた「人間の安心」という文章です。違うところでは、人間はもともと何も持って生まれては来なかったし、何も持って死んでは行けないものなのだと、「本来無一物の安心」という言い方もしています。

みずから創設した慶應義塾や時事新報についても、それらはもともと無かったものだからいつ潰してもかまわないとふだんから考えていたから、いつも安気にこれを経営することができたとも言っています。絶対潰してはならないと思うと心が萎縮してしまう、こんなものはもともと無かった、いつ潰してもかまわないと思っていれば、軽やかに駆け引きでき軽やかに決断できる、だから、そういう人の方が活発で事業もうまくいくのだ、と言っています。

人間蛆虫論、人生戯れ論ともいうべき、こうした言い方は、啓蒙家・福沢にはやや意外ですが、むしろそう言い切ること、かえってそこにある種の「安心」なり、「活発さ」なりを引き出しているわけです。そして、そういうことを覚悟できる広大な心を持っている人間こそが「万物の霊」として尊いのだと、論理をひっくり返すようなかたちで、人間至尊論へと反転させています。人間の「尊さ」を啓蒙するということ、われわれの慣れ親しんでいる福沢像はそのうえで展開されていたわけです。さきの唐木の言い方でいえば、無常性というものを徹底して押し詰める中から、あらためて肯定的な生き方というものを引き出している一例です。

そこでの「無」の認識というのは、むしろまったく何も無いという、西洋風な *Nichs* (*Nothing*) の認識ではありません。その認識を推し進めることによって、そこに、ある場なり働きなりが見えてくるという認識です。

福沢の「人間の安心」という文章は、『福翁百話』の第七話として挙げてあったものですが、それは、第一話「宇宙」、第二話「天工」、第三話「天道人に可なり」と、天や宇宙の「おのずから」の働きがどうい

であるかを解き明かす文脈の中で語られています。——「万物は常に動き常に変じ、随しなて生じ随て滅して」いるが、「宇宙天然の大機関は靈妙不可思議にして、此地球面の万物、上は人類より下は禽獸草木土砂塵埃ちじあの微に至るまでも其処そのところを得ざるなし」と。つまり、そこで見えてくる場なり働きというのは、宇宙・自然の「おのずから」の場であり働きだということなのです。

福沢もふくめて、近代日本の知識人には、「死んだら無になる」という死生観が多く見られます。が、「死んだら無になる」というその「無」は、けっしてまったく何も無くなるということではなく、大きな自然、大いなる宇宙にまた戻る、そこから出てきて、またそこに戻るといふ意味合いでの「無」であることがわかります。「死んだら無になる」といいながら、なおそこに、ある種の「安心」なり「慰め」なりが可能になっているゆえんです。

無常という言葉を使えば、確かにその「無」は、常無しの移り行きでありながら、つねに同時に「おのずから」の移り行きでもあると認識しているということです。寺田寅彦の言い方を借りるなら、無常というのは確かにむごたらしく暴力的であるが、それは同時に厳父でもあり慈母である天然・自然の、その無常ということでもあるということです。

もうひとり、近代日本の早い時点で、東洋・日本の美を西欧に紹介しようとした岡倉天心は、「はかないことを夢に見て、美しい取りとめのないことをあれやこれやと考えようではないか」という言い方をしています（『茶の本』）。あえてなされたこうした言い方には、あらためて「はかなさ」の感受性を受けとめようとする決意がうかがわれますが、それは、次のような茶の道の理解にもつながっています。

茶道の要義は「不完全なもの」を崇拜するにある。いわゆる人生というこの不可解なものうちに、何か



可能なものを成就しようとするやさしい企てである。

(岡倉天心『茶の本』)

無常という、相対有限で「不完全」「不可解」な人生を生き死なざるをえない「みずから」が、そのことを自覚することにおいて、そこに働いている「おのずから」の働きを感受し、そこに「何か可能なものを成就しようとするやさしい企て」である、と。そこには、日本人の無常観とそれにもとづく美意識(幽玄・あわれ・わび・さび・しおり)の伝統の近代表現があるように思います。

## 五 「人間はなお荘嚴である」

見田宗介の「世界を荘嚴する思想」(『現代日本の感覚と思想』)という考え方は、こうした「企て」の現代的な試みであり、さきに見た唐木の提言を真つ向から受けとめるものです。

……前世紀末の思想の極北が見ていたものが〈神の死〉ということだったように、今世紀末の思想の極北が見ているものは、〈人間の死〉ということだ。／それはさしあたり具象的には、核や環境破壊の問題として現れているが、そうでない様々な仕方でも感受されていて、若い世代はこのことを日常の中で呼吸している。核や環境汚染の危機を人類がのりこえて生きるときにも、たかだか数億年ののちには、人間はあとかたもなくなっているはずだ。未来へ未来へと意味を求める思想は、終極、虚無におちるしかない。／二〇世紀末の状況はこのことを目にみえるかたちで裸出してしまっただけだ。／人類の死が存在するということ、わたしたちのような意識をおとずれる〈世界〉に終わりがあるという明晰の上に、あたらしく強

い思想を開いてゆかなければならない時代の戸口に、わたしたちはいる。

(見田宗介「世界を荘厳する思想」)

現代の思想の極北は、「人間の死」「人類の死」ということだ、と言い切っています。それはさしあたり目に見えやすいかたちでは、「核や環境破壊の問題として現れている」が、とりわけ若い世代には「そうでない様々な仕方でも」受けとめられているとも指摘しています。「未来へ未来へと意味を求める思想」とは、さきに見た「はかどる」こと、「はかる」ことを第一に優先しようとする「*prospect* 前望姿勢」のことです。それは「終極、虚無におちるしかない」のであって、われわれは「〈世界〉に終わりがある」という、はつきりとした認識(「明晰」)をふまえて、そこに「あたらしく強い思想」を開いてゆかなければならないと主張しています。ところで、この「世界を荘厳する思想」は、直接的には石牟礼道子の「人間はなお荘厳である」という言い方を受けています。石牟礼のその言葉は、「水俣の現在」という雑誌特集号に寄せられたもので、それは、こう書きだされた文章の中に置かれています。

人間の上を流れる時間のことも、地質学の時間のようにいつかは眺められる日が、くるのだろうか。

(石牟礼道子「海はまだ光り」(『思想の科学』)

——すなわち、見田によれば、この文章全体において「石牟礼はどこかで〈人間〉を、もう死んだものとして感覚している。あるいは、いつ死んでもおかしくないものとして感覚している。その人間の死にぎわに添おうとしている。人間を荘厳しようとしている」というわけです。以上のことをふまえたうえで、見田はこう述

べています。

ひとりの死者をほんとうに荘嚴するとは、どういうことだろう。その死身の外面に花を飾ることだけでなく、その生きた人の咲かせた花に、花々の命の色に、内側から光をあてる、認識である。それは石牟礼が、その作品で、具体的に水俣の死者のひとりひとりを荘嚴してきたやり方である。

このようにしてそれはそのまま、生者を荘嚴する方法でもある。その生者たち自身の身体にすでに咲いている花を目覚めさせること。リアリティを点火すること。〈荘嚴である〉というひとつの知覚は、死者を生きさせるただひとつの方法であることよって、また生者を生きさせるただひとつの方法である。ひとつひとつの空の洞にふるえる天日のあるさのように、それはこの個物ひしめく世界のぜんたいに、内側からいつせいに灯をともし思想だ。

(見田宗介「世界を荘嚴する思想」)

「仏」＝死者を花飾る意味の「荘嚴」という言葉が、(いま生きているがやがて死ぬ、あるいはもう死んだものとも感覚されている) 生者を、そのひとりひとりを、そしてそれらの人々のひしめく世界全体を花開かせるという意味に転用されています。

見田(真木悠介)は違うところでは、ほぼ同じことを「色即是空 空即是色」の「転回」ということ、こう述べています。

われわれの行為や関係の意味というものを、その結果として手に入る「成果」のみからみていくかぎり、人生と人類の全歴史との帰結は死であり、宇宙の永劫の暗闇のうちに白々と照りはえるいくつつかの星の軌

道を、せいぜい攪乱しうるにすぎない。いつさいの宗教による自己欺瞞なしにこのニヒリズムを超克する唯一の道は、このような認識の透徹そのものかなたにしかない。

すなわちわれわれの生が刹那であるゆえにこそ、また人類の全歴史が刹那であるゆえにこそ、今、ここにある一つ一つの行為や関係の身における鮮烈なおしさへの感覚を、豊饒にとりもどすことにしかない。

い。

（真木悠介「色即是空と空即是色——透徹の極の転回」『気流の鳴る音』）

「色即是空と空即是色——透徹の極の転回」とは、唐木の、「無常なるものの無常性を、徹底させる」ところでの「反転」ということですが、しかしじつは、このあまりにもよく知られた「色即是空 空即是色」という仏教論理自体は、かならずしも理解しやすいものではありません。語釈としては、「すべての物的現象（色）は実体がない（空）、しかしその空の本性がそのまま万有の現象である」としか訳しようのないお経の文句です。この文句を、どう生きた思想の言葉として語りうるか、が問題だということです。唐木の言い方を借りれば、「さつじふ言ひふるされて具体的意味を失ってしまった言葉の意味内容を、あらためて考へる」ことが重要なのだということです。

そのことはつねに、仏教そのものにも求められてきたことです。さらにそれはすこし言葉の幅を広げれば、かならずしも仏教だけに限定されるものでもない、人間存在の根源を問う優れた思想や宗教にはかならずや何らかのかたちで見いだしうる、ある普遍性を備えた考え方だろうと思います。

今年の六月、スペインの「カタルーニャ国際賞」を受賞した作家の村上春樹は、「非現実的な夢想家として」という受賞記念スピーチにおいて、反原発への倫理・規範の再生が、こうした「無常（mujo）」の認識に

はさまれながら語られています。

……我々は、無常(mujō)という移ろいゆく儚い世界に生きています。生まれた生命はただ移ろい、やがて例外なく滅びていきます。大きな自然の力の前では、人は無力です。そのような儚さの認識は、日本文化の基本的アイデアのひとつになっています。しかしそれと同時に、滅びたものに対する敬意と、そのような危機に満ちた脆い世界にありながら、それでもなお生き生きと生き続けることへの静かな決意、そういう前向きな精神性も我々には具わっているはずで。

(村上春樹「非現実的な夢想家として」)

そもそも村上作品には初期から、「無から生じたものかもとの場所に戻った。それだけのことさ」(「1973年のピンボール」)といったような無常観が基調低音として流れていましたが、村上は今あらためて、それを思い起こしながら、こう主張しています。

——われわれを原発に駆り立てた「効率や便宜という名前の持つ「現実」に追いつかせてはならない。われわれは力強い足取りで前に進んでいく「非現実的な夢想家」でなくてはならない」と。

最後に一言だけ、急いで確認しておきたいのですが、かといって、以上のことは、むしろ「はかる」ことそのものの否定ではありません。復興には何より、スピードと効率が求められるし、原発事故の収束の問題は、それがたとえ「はかり」がたい何ものかであるとしても、今結集しうるかぎりの総力をあげて「はかり」きるほかはない、放射能防護対策でも同じでして、今決定的に欠けているのは、科学的な意味においても、政治的な意味においても、そうした「はかる」ということだということとはあらためて申し上げるまでもないことだろ

うと思います。

「はかなさ」の感受性は、「はかる」ことと単純な二者択一の問題ではないのでありまして、それは、どこまでも、「おのずから」と「みずから」の「あわい」の思想感情だということです。

〔参考文献・引用文献〕

- 寺田寅彦 「日本人の自然観」「国防と天災」(岩波文庫『寺田寅彦随想集』、一九四八)
- 鷺田清一 「老いの空白」(弘文堂、二〇〇三)
- 梅棹忠夫 「未来社会と生きがい」『私の生きがい論』(講談社、一九八五)
- 唐木順三 『無常』(筑摩書房、一九六三)
- 福沢諭吉 「人間の安心」『福翁百話』(明治文学全集『福沢諭吉集』、筑摩書房、一九六三)
- 岡倉天心 『茶の本』(岩波文庫、一九二九)
- 見田宗介 『現代日本の感覚と思想』(講談社学術文庫、一九九五)
- 石牟礼道子 「海はまだ光り」(『思想の科学』、一九八六・六)
- 真木悠介 『気流の鳴る音』(ちくま文庫、一九八六)
- 村上春樹 「非現実的な夢想家として」(「カタルーニャ国際賞」受賞記念スピーチ、二〇二一・六)
- 同 『一九七三年のピンボール』(講談社文庫、二〇〇四)